インドでの２週間

１　私はこの夏、大きな経験をした。たった２週間だったが、自分の中で大きな財産となったと思う。インドへ行くことを決めたのは、初めてこのプログラムを知った時だ。もともとインドには興味があり、いつか行ってみたいと思っていた国であった。ただ一人で行くにはリスクが高いと思っていたので、その中で最高の機会だった。はじめてインドへ着いた時に感じたものは一生忘れないと思う。空気も匂いも人も雰囲気も、すべてが新鮮だった。空港には銃をかまえる警備員がたくさんいて、日本では考えられない光景に驚いた。空港をでるとたくさんの人の量に圧倒された。すぐ横を見れば首輪もしていない犬達がぽつぽつといて、少し道路にでると鳴り響く車のクラクションの音に怯んだ。空港に着いたのは既に 22 時をまわっていたが、車の量は多く、町には人が溢れかえっていた。整備されているとは言いがたい道は、ガタガタで、まるでアトラクションに乗っているようだった。バスは車線を無視して、少しでも隙間があればそこを器用にすり抜けて、どんどん進んでいく。窓から見る景色は全てが新しく、鳴り響く町の音はまるで生きているようだった。ネオンが輝いているような明るさはないが、街は活気づいていた。長時間のフライトで疲れているはずだったが、寝てしまうのがもったいないような気がして、終始起きていた。インドでの生活は毎日が新しいものの発見で、いつも通っているはずの通学路さえ、その都度違った場所を通っているように感じた。人の量は朝晩関係なく多く、いかに人口が多いかを思いしらされた。街を歩けば、物乞いの子供が近づいてきたり、両目の見えない老人が何か唱えて歩いていたり、なにか考えさせられるものもあった。また、この国ではどれだけ宗教が国民の生活や精神を大きく支えているのかがよく分かった。日本人は、結婚式は教会で、お盆にはお墓参りを、というような感じで、決められた宗教に所属しているという人が少ないが、インドでは、生活の中心が宗教なんだということがわかった。例えば食材には必ず、ベジタブルかノンベジタブルかが記入されている。更に家の前にガネーシャの置物をおいたり、徹底されているなと思った。
やはり、学校の授業で何時間もかけて勉強することよりも、実際に現地に行き、この目で見て、肌で感じるということでより多くのものを吸収できるなと思った。

２　授業について

(1)　ヨーガは毎朝８時半から行った。ヨーガをするのは初めてだった。目を閉じて、自分の鼓動を感じた。呼吸をこんなにも意識するのは初めてで、自分が生きてるなあと感じることができた。ヨーガはただ体を動かすだけでなく、呼吸を意識す

ることで精神を鍛える力もあるのかなと思った。

(2) ヒンディー語を勉強するのは初めてだったが、「あいうえお」など少し日本語と似ている発音もあった。ただ、同じ「お」でも何種類か違う発音のものがあったり、難しく感じた。文字は日本語とは全く違うもので、あの短期間で習得するのは難しかった。ヒンディー語の授業の後半は、会話表現やインドの祭りについて学習したり、楽しかった。ガネーシャについては、夢を叶えるゾウのモデルとなっていることくらいしか知らなかったので、両親も神であったり、顔が象である理由であったり、そういった話を聞くのはおもしろかった。また、いかにインドでは宗教が生活を大きく左右しているかわかった。

(3) 英語の授業は、文法を勉強したり、英語を使ったゲームをしたり、楽しかった。ただ、インド人の先生の発音は少し聞き取るのが難しかった。全体を通して、先生と生徒との距離が近く、授業に参加している、という感覚があった。その点、日本での授業は先生と生徒との距離が遠いのかなという気がした。

(4) 経済・経営の授業では、インドの経済や経営についてわかりやすく説明してもらった。先生も優しくておもしろかった。

3　文化交流プログラムについて

どの学部の生徒も、それぞれの特技を持っていてそれを披露してくれた。皆ハイレベルで、器用だなと思った。踊りを披露してくれた学部の子達に途中から一緒に踊ろうと誘ってもらったり、ほかにも、ヘナタトゥーをしてもらったり、とても楽しい時間を過ごせた。他にも、お昼休みの時間や、放課後など、どこから来たの？と気軽に話しかけてくれたり、写真撮ろうと言ってくれるインド人もいて、楽しかった。また、もっと英語が喋れたらなという気にもさせられた。

4　遠足について

(1) ムンバイの中心地はとても栄えていて、同じインドでも、こうも違うのかと思い知らされた。インド門へ行ったり、ミュージアムへ行ったり、ショッピングをしたり、ガンディーの家を見に行ったりした。ガンディーの家では、ガンディーがどれだけ偉大な人物で、いかに国民に崇拝されているかが伝わってきた。ムンバイではインドの発展している部分をみることができた。

(2) Karla Caves はとても神秘的な場所だった。このプログラムに参加していないと訪れていない場所だったと思う。そこへの階段はすこし疲れたが、上から見る景色は綺麗で鮮明に覚えている。その前に行った村では、ベジタリアンの食事をいただいた。これは貴重な体験だったと思う。プレートの上のご飯の置く順番には意

味があるということも教わった。ただ、宗教性が強く、不思議な空間にいるような気がした。

5　私がこの旅を通して一番得たものは、ボランティアの人達との交流の中にあったと思う。言葉が通じず、うまくコミュニケーションが取れなくて、はじめはとても歯がゆかった。それから逃げるように、言い訳をしたり御託を並べたりしていたが、そうゆうことじゃないんだなと途中から気づかされた。ボランティアの人達は、朝早くから夕方まで私達のために時間を割いてくれ、買い物に行きたいと言えば、周りの人達に聞きまわってお店に連れていってくれたり、なにからなにまでサポートしてくれた。何日目かにホテルで皆でご飯を食べた時が１番思い出に残っている。皆気さくで、一緒にダンスを踊ったり、冗談を言って笑い合ったり、とても楽しい時間を過ごした。その他にもミュージアムに行ったときは、説明しながら一緒に回ってくれたり、一緒に行った細田さんの誕生日には、サプライズケーキを用意してくれていたり、とても親切にしてもらった。本当に感謝してもしきれない。彼らは、英語ができない私達に yes か no で答えられる簡単な英語でコミュニケーションを取ろうとしてくれた。旅も終わりに近づいた頃、このままではいけないなと思った私は、下手なりに自分から英語で意思を伝えてみた。すると皆が一生懸命聞き取ろうとしてくれて、私も yes か no で答えているだけではいけないなと思った。それから私は自分の意思を伝えるということの大切さが分かった。そのことがきっかけで、皆との距離も近くなったと思っている。どの場面でも私たちがベストな状態でいれるようにたくさん世話をかけてもらい、本当に感謝している。最後にはお互いに連絡先を交換し、今でも連絡を取り合えていることをうれしく思う。私はかけがえのない友達を手に入れた。それだけでなく、自分の英語力の低さを改めて感じることができ、私はこの旅で自分に足りないものや新たな目標を見つけることができた。逃げているだけでは進歩しないことや何か行動を起こすことの大切さが分かった。ただ生きているだけではもったいないし、興味のあることには積極的に取り組んでいこうと思う。

6　その他（とくに来年度の参加者にとって参考になること、プログラムの改善など）

　インドではカースト制度や女性差別などが大きな問題となっているが、今回の旅では、インドの「綺麗な部分」を主に見てきた。そのためそういったところを見る機会が少なかった。たしかに大学を通してのプログラムである以上、安全面がきちんと守られてこその旅だと思うが、お土産ばかりみる旅より、リアルなインドをもっと見てみたいなと思った。